

ラップフィルムを活用した 鼻腔分泌物の性状評価と検体採取

◇ インフルエンザ迅速診断の検体は、鼻腔に綿棒を深く挿入して、粘膜面をぬぐって採取するのが通例です。

◆ この方法を経験した多くの方は「痛い！」と嫌います。

◆ 医師の立場では、「鼻汁が出ない」と答える方において、良質の検体が採取できているか否か、検体の質の低下を、懸念します。

◇ 15cm 幅のラップフィルムを活用することで、診療の質が随分高まりました。（30cm 幅は操作性が劣ります。）

◇ 採取法：ほぼ正方形に切り取り、広げたままで、患者の両手に渡し、左右交互に鼻をかんでもらいます。

◇ 得られた検体と“本物”の評価

a 「透明・サラサラ」、b 「透明・ネバイ(粘液)」

c 「白濁」、d 「黄～橙色」、e 「出ない・採れない」

a：アレルギー性鼻炎、ウイルス感染の初期

b：インフルエンザ検査検体に最適！

c：非化膿性・治癒期、d：化膿性～副鼻腔炎など

◆ 「鼻汁が出ない」と答える方でも、「大太鼓を叩くように」と促すことで、b 検体が採れ、インフルエンザ迅速検査が陽性に出ます。

◆ 従来法では、くしゃみ・セキを誘い、環境汚染が多々ありました。
ラップフィルム法は、患者・環境に優しい検体採取法です！

◆ d. 検体は細菌検査に活かしています。

= 柔軟な診療姿勢⇒優しく良質な方法の発見・定着！ =